

台湾  中華郵政

一夜にして大スターが誕生する、という夢物語はどの国にもどの時代にもある。去る2015年下半期、台湾を最も騒がせたアイドルは、人間ではなくなんと郵便ポストだったことはご存知だろうか。その夏、台北を襲った大型台風は街の看板をはずり取り、ポストの上に落下させた。普通・速達と2本並んで立っていた彼らは揃って斜めに傾き、その姿が可愛いとSNSで画像が拡散され、台湾のみならず世界中に噂が広まり、一目見ようとやってくる観光客でたちまち行列ができたのだった。その後、様々な業者がこの斜めポストのグッズを次々と販売し、郵便局の各所でフィギュアが展示されたりと、中華郵政のイメージアップに一役も二役も買っていた。

斜めのポストは偶然の産物だが、かねてより中華郵政は、先住民の民族衣装や祭事をデザインしたカラフルなポストを台湾各地に設置するプロジェクトを進めており、話題になっている。今年の11月で17本となるようだ。

さて、昨年2016年は中華郵政の120周年、そして郵政博物館はオープン50周年の、記念すべき年だった。台北の中心、中正紀念堂の近くにある郵便博物館に行ってみれば、その規模に驚かされるだろう。1階には郵便局、2階から6階が全て博物館。1800年代から始まる中華郵政の歴史を、ポスト・制服・集配システム・切手などから丁寧に紹介している。世界各国の郵便局のポストや制服のコレクションも充実しており、なんといっても圧巻なのは、約8万枚を収蔵した世界の切手コーナー。今まで切手に興味がなかった人も、現物の美しさには目を奪われるにちがいない。これだけ盛りだくさんなのに入場料は非常に安い(5元=約20円)。

忘れてはならないのが、博物館の周りに軒を連ねる古切手屋。夥しい枚数の古い記念切手や絵葉書が足の踏み場もなく積み上がる中、埋もれるように店主が佇んでいる。うっそうとした店内は、時が止まったよう。「台湾の民話モチーフの古切手を」とリクエストすると、膨大なファイルの中からの確かなものを選び出してくれる。ならば次はこのような、の繰り返しで、あっという間に時間は過ぎる。切手の小さな絵柄から、世界中にタイムトラベルすることができる。さあ、台北からは誰に手紙を送ろうか。



中華郵政のオリジナルボックス。2016年、南端に近い屏東枋山郷に、この箱をそのまま大きくしたようなユニークな外見の郵便局ができ、世界の郵便ファンのお話となっている



中華郵政120周年を記念する切手シート。上段が昔の集配バッグ、ポスト、自転車、下段が近代のものとなっており、コンパクトに郵政の歴史の移り変わりがわかる